

これからの乳児保育の質と課題を考える : ナース リールーム40周年アンケートから

著者	松村 千春, 井桁 容子, 川合 貞子, 岩田 力
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	49
ページ	59-64
発行年	2009
出版者	東京家政大学
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00009262/

これからの乳児保育の質と課題を考える ～ナースリールーム40周年アンケートから～

松村 千春*, 井桁 容子**, 川合 貞子***, 岩田 力****

(平成20年9月30日受理)

A Study of the Quality of Child Rearing —From the Questionnaire Survey on the 40th Anniversary of the Nursery Room of Tokyo Kasei University—

MATSUMURA, Chiharu IGETA, Yoko KAWAI, Teiko and IWATA, Tsutomu

(Received on September 30, 2008)

キーワード：保育の質，子育て支援，子どもの権利，保育園の役割

Key words : the quality of child rearing, the support for child raising, children's rights, the role of the day nursery

I はじめに

近年，わが国の少子化は止る気配がみられず，それとともに子育てや保育を取り巻く環境の激動ということばが匹敵するかなような大きな変化が続き，そして子どものこころの育ちや親子関係の問題なども，保育や教育関係者のみならず，誰もが認めないわけにはいかない状況で深刻化してきている。21世紀初頭のわが国のこの現状を，乳幼児の保育に関わる者としてどのように捉え，何を守り，何を変えていかなければならないのかが重要な課題として目前にあり，その対応や姿勢こそが，子どもたちの豊かな未来を保障する大人たちの責務として今，求められているといえる。

そのような中で，保育所保育指針が改定，告示化され，子どもの権利の尊重，保育の質の向上，保育者の専門性，子育て支援の重要性などがあらためて強調されている。東京家政大学ナースリールームは1967年（昭和42年）に山下俊郎（当時，児童学科長・幼児心理学者）および跡見一子（児童学科教授，小児科医），宮崎照子（児童学科助教授）らによって，幼稚園年齢以下すなわち3歳未満の乳幼児のための保育施設として開設された。

開設の理念（10周年記念誌より）としては，

- 子どもの権利を尊重した乳幼児の立場にたった保育の場として
- 児童学科保育科の学生の学びの場として
- 女性の就労支援のための保育施設として
- 大学独自の研究機関として

上記の理念によって，他大学には類をみない施設として，存続しつづけ2007年5月で40周年を迎えることができた。

現代社会の抱える問題を補うこととして新保育指針において強調されている視点を，40年前にすでに見据えながらナースリールームを開設されたことに，その偉大さと先見の目的確さに驚きと畏敬の念を感じずにはいられない。

II 研究目的

市場原理に巻き込まれることなく大学の研究機関として，子どもの立場に立った子どもの思いを尊重するという理念を，保育の中心に据え置いて実践することができたこれまでのナースリールームの保育とは，どのようなものであったのか，どのような役割を担ってきたのかを振り返ることは，保育ばかりでなく社会そのものが混迷する現代において，人間の土台作りにある乳幼児が心身ともに健康に育つ環境のあり方を考えるために，重要な視点が得られると確信する。さらに，新保育指針においても求められているように，子どもの育ちを支える保育の場として自己評価の必要性と，そこから得ることができた結果についての発信および説明責任を果たすことによって，これからの乳幼児の保育の質や課題をみいだすことを目的としたいと考えた。

そこで開設40周年を機会に，開設当初からのナースリールームに入室した子どもの保護者を対象にアンケートを依頼し，その内容を分析し考察をおこなった。

III 調査対象及び方法

調査期間：2007年4月

方法：アンケート送付

対象：S42年度～H18年度までの卒園児保護者

* * * * ナースリールーム

* * * 乳児保育研究室

* * * * 小児医学研究室

送付数：169（在籍累計 230）

回収数：96（回収率 56％）

回答者：父 8 母 85 本人 5

（母、本人連名で書かれたものも含む）

- (2) 自分をしっかり持っている 15
- (3) 協調性がある 14
- (4) 子ども自身に安定感がある 13
- (5) 自然が好きで豊かな心に育った 8
- (6) その子らしさが育った 7
- (7) 創造力、創造性がある 5
- (8) 食事面 4
- (9) その他 3

IV アンケート質問項目及び結果

1 ナースリールームを知ったきっかけは何ですか？
（複数回答）

- ① 学内の教職員 39（人）
- ② 在園経験者又は在園経験者から聞いた 33
- ③ 板橋区保育園情報 4
- ④ その他 22

2 預けた理由は何ですか？（複数回答）

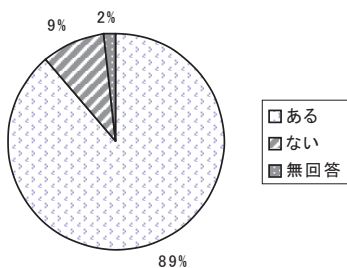
- ① 親が仕事をしていた 79（人）
- ② 子ども同士の関わりを持たせたかった 16
- ③ 家庭の事情により 8
- ④ その他 11

3 なぜナースリールームを選びましたか？（複数回答）

- ① 環境が良かった 84（人）
- ② 少人数で家庭的な雰囲気 74
- ③ 大学の中にあることに安心感があった 65
- ④ 保育理念・内容に共感した 55
- ⑤ 通園に都合の良い場所にあった 47
- ⑥ たまたま空きがあったから 1
- ⑦ その他 11

4 卒園後のお子さんの育ちの中にナースリールームでの生活がよく影響していると感じたことはありましたか？

- ある 85（89％）
- ない 9（9％）
- 無回答 2（2％）

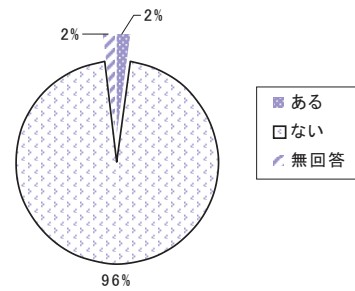


① <ある>と答えた方に伺います。それは具体的などのようなことでしたか？（自由記述を主な内容ごとにまとめた）

- (1) 人を思いやる心を持っている 24（人）

5 悪い影響があったと感じたことはありましたか？

- ない 92（96％）
- ある 2（2％）
- 無回答 2（2％）



① <ある>と答えた方に伺います。それは具体的にどのようなことでしたか？（自由記述）

- 次の集団で多人数に戸惑っていた 2（人）

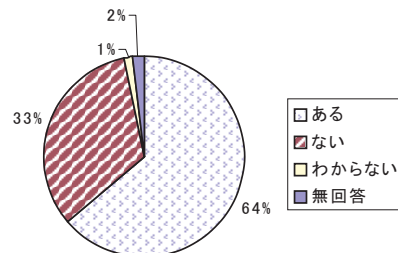
6 ナースリールームの食事について伺います。

① 食事について印象に残っていることは何ですか？
（自由記述を主な内容ごとにまとめた）

- (1) 食事の豊かさ 94（人）
- (2) 好き嫌いが少ない 7
- (3) 栄養士が子どもを見てくれている様子に安心 5
- (4) その他 3

② ナースリールームの食事がご家庭の食生活に影響を与えたことはありますか？

- ある 61（64％）
- ない 32（33％）
- わからない 1（1％）
- 無回答 2（2％）



(1) <ある>と答えた方に伺います。それは具体的にどのようなことでしたか？（自由記述を主な内容ごとにまとめた）

- (ア) ナースリーの献立を取り入れ家庭の
食事が変わった 37 (人)
- (イ) 好き嫌いがなくなった 18
- (ウ) いかに楽しく食事をするか
考えるようになった 8
- (エ) ゆっくりひとつひとつ味わって
食べる食習慣ができた 3
- (オ) その他 6

ない 6 (6%)
無回答 4 (4%)

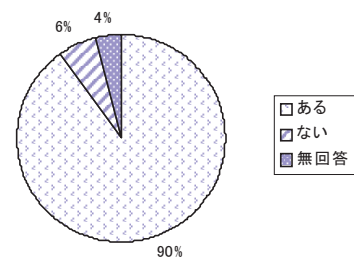


図5

7 ナースリールーム卒園後に入園した幼稚園・保育園等でナースリールームとの違いを感じたことはありましたか？

ある 80 (84%)
ない 13 (13%)
無回答 3 (3%)

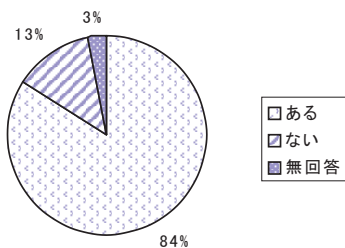


図4

① <ある>と答えた方に伺います。それは具体的にどのようなことでしたか？（複数回答）

- (1) 園全体の雰囲気 55 (人)
- (2) 保育者の対応 48
- (3) 子どもの生活する様子 35
- (4) 保護者との関係 31
- (5) 食事 27
- (6) その他 10

内容（自由記述を主な内容ごとにまとめた）

- (ア) 保育理念の違い 58 (人)
- (イ) 環境の違い 6
- (ウ) 食事の違い 5
- (エ) 親の教育方針の違いを感じた 4
- (オ) その他 4

8 ナースリーに通ったことが現在の家族や家庭生活に影響していると感じることはありますか？

ある 86 (90%)

① <ある>と答えた方に伺います。それはどのようなことでしたか？（複数回答 具体的な内容は自由記述）

- (1) 子育て観 69 (人)
- 子どもを一人の人間として尊重できるようになった
 - 辛さよりも楽しさに目を向けるようになった
 - 待つ、ゆったりと過ごすことを学んだ
 - 子どもの良さがどんどん見つけられるようになった
 - 子どものやりたいこと個性を伸ばすことが子どもの幸せにつながると思った
 - 子どもが大切であると思っていることを伝えてあげることが重要だと学んだ
 - 連絡帳等密な連絡の取り合いにより子どもの成長を詳細に認識できた
 - 子育て全てに影響があった

- (2) 人生観 27
- 自分の価値観全ての中で自分の考えを見直すことや自己肯定ができた
 - 女性も子育てしながら自分の人生も大切にしていけることを感じた
 - 親を初めとして様々な人たちと関わることの大切さを知った
 - 自分の育ってきた環境を考えるきっかけになった
- (3) 家族観 25
- ナースリーでの教えがそのまま我が家の羅針盤になっている
 - 父親の育児参加が積極的になった
 - ナースリーの生活が兄弟姉妹共有のものとなっている
- (4) 夫婦観 10
- (5) その他 8
- 他の子どもも同じ目で広い心で見られるようになった

- ・ ナースリーが母にとって自慢

V 考察

問1の「ナースリールームを知ったきっかけは何ですか?」については、<学内の教職員だったから>が40%であり、<預けたことがある人から話を聞いて>34%を含め、卒業生や保護者の職場の同僚だったなど何らかの形で実際にナースリールームを知っていた人や知っている人から聞いたという回答が半数以上あり、口コミで情報が広がっていることがわかる。

問2の「預けた理由は何ですか?」については<両親が仕事をしていて>82%、<子ども同士の関わりを持たせなかった>16%である。回答者のうち、専業主婦が7名おり、保護者が仕事を持っていなくても子ども同士のかかわりを考えて預けたというケースもある。地域の人との関係性が希薄で、子ども同士の自然なかかわり合いが持てず、身近に助けてもらえる人も少なく、家庭の中で子どもと二人で向き合いストレスや悩みを抱えている親も多い現状で、子育てを援助してくれる場が求められていることも、入室を希望する理由の中に内在していることは感じられる。しかしそれだけではなく、どのような背景の親子であっても、それぞれに自分らしく生活できることを保障する環境を意図して設けることのできる専門の場所として、保育の場がその役割を果たすことを期待されているとは言えないだろうか。

問3の「なぜナースリールームを選びましたか?」については<環境が良かった>84%、<少人数で家庭的な雰囲気>77%、<大学の中にあることに安心感があった>67%であった。大学という守られた環境の中で、緑豊かな自然に触れながら安心して生活できることを理由として挙げている人が多かった。このことは、物的環境が子どもが生活する場として重要であることを親が十分認識していることと、園を選ぶ時のポイントになっていることがわかる。また、<保育理念・内容に共感した>が57%で、実際にナースリールームで我が子が生活していく中で、保育理念がしっかりと伝わっていたことがわかる。<通園に都合の良い場所にあった>は48%で、半数を割っている。そのなかには大学教職員も含まれており、大人の利便性を中心に選んでいないことがわかった。

問4「卒園後のお子さんの育ちの中にナースリールームでの生活がよく影響していると感じたことはありますか?」については、89%が良い影響があったと答えた。その中で「優しく気配りできる温かい心が育った」「人の気持ち

を大切にすることができる」「自分より下の子をいたわり、面倒をみることができる」等<人を思いやる心を持っている>と解釈できる回答が25%、また「慣れない場所でも友達を作る名人だった」「幼稚園入園時から友達との交流がスムーズであった」等<協調性がある>と解釈できる回答が14%と人との関わりを中心とした子どもの心の育ちを挙げた回答が全回答の41%であった。普段の保育の中では一人ひとりに応じた丁寧な関わりを心がけ、その子らしさが育つ援助をしている。中でも子ども同士の関わりをよく見てその状況を丁寧に捉え、場面に応じて保育者がそれぞれの思いをできる限り言葉にして解説することを心がけてきた。そのことが人と関わる時の気持ちや対応に少なからず影響していると思われる。また、「悪い影響があったと感じたことはありましたか?」については<ある>が2%で、具体的には「次の集団で大人数に戸惑っていた」という回答であった。

問5の①「食事について印象に残っていることは何ですか?」については「心のこもった手作りの食事」「季節感がある」「素材の味・だしの味が活かされた食事」等<食事の豊かさ>と解釈できる回答が86%と多かった。

問5の②「ナースリールームの食事がご家庭の食生活に影響を与えたことはありますか?」については<ある>が64%で、具体的には「ナースリーの献立を取り入れて家庭の食事が変わった」「好き嫌いがなくなった」等があり、肯定的な回答がほとんどを占めていた。子育ての悩みのなかで上位を占める食事について、離乳食の段階から保護者と管理栄養士・保育者が連携を取りながら、その子に合わせたすすめ方や食に対する考え方を共に考え共通理解していくことは、子育てを支援するうえで重要なウエイトを占めていることが確認された。

問6の「ナースリールーム卒園後に入園した幼稚園・保育園等でナースリールームとの違いを感じたことはありましたか?」については84%が<ある>と答えた。具体的には<園全体の雰囲気>57%、<保育者の対応>50%、<子どもの生活する様子>36%であった。その内容としては、<保育理念の違い>と解釈できるものが60%で最も多く、「子どもの育ちを中心に置いた保育でない」等、本来子ども中心であるべき保育が大人の都合優先のものになっていることを残念に思うという内容の意見もあった。保護者の保育に対する意識の高さを感じる。入園当時は、子育てが全くわからず、目の前の悩みを一つずつ解決したり一緒に考えていくことから始まる親が多く、初めから同じ視点で子育てを語れているわけではない。しかし、ナースリールームでの保育の中で、送迎時の保育者とのやりと

りや連絡帳、保護者会、面談などを通じて、実際の子どもの育ちを目の当たりにしながら子どもの視点に立ち、見通しを持って“今大切にしなければならないこと”を日々伝えていく中で、親の子育てに対する意識に少しずつ変化が見られていると思われる。保育者は具体的な日々の子どもの成長の様子を保護者とともに、丁寧に積み重ねていく意識や、保育の意図、子どもの育ちの見通しなどをきちんと説明していくことが非常に大切であることを改めて感じさせられた。

また問7の「ナースリーに通ったことが現在の家族や家庭生活に影響していると感じることはありますか？」については90%が「ある」と答えたことに驚かされた。中でも子育て観を挙げた回答が71%で最も多い。具体的な回答例としては「子どもの見方が変わり辛さよりも楽しさに目を向けるように変化した」「子どもを一人の人間として尊重できるようになった」等がある。子どもの在籍年代別に回答を見ると大きな傾向はなく、開設当初から現在まで共通した内容が多くあった。

ナースリールームは“子どもの立場に立つ”ということを第一に考え、一貫した保育ができるように9時から17時の保育時間を開設以来守り続けている。仕事を持つ保護者にとってみれば不都合な条件と言える。しかし回答からは子どもの心の育ちを喜び、且つ子どもを見る目が変わった等保護者自身の学びや成長を喜ぶ例が多く見られる。以上の結果は、保育園を選ぶときに、必ずしも、親の都合が優先されるとは限らないこと、子育てを楽しむことのできる子ども観を伝えることが、私たち保育者に求められていることであるといえる。それは、まさに保育者の専門性を求められているといえよう。そのためには、担当制による一貫した関わりと時期を逃さない助言、また子どもの思いの解説、意味付けの重要性をも示唆していると言える。

VI まとめ

今回の調査で、年代を問わず多くの保護者が我が子の育ちを肯定的に捉えているということがわかったことは、これからの乳児保育や子育て支援を実践していく上で大変重要なことに気付かされたと言える。子どもの立場に立ち丁寧さを心がけた乳児保育は、子どもの育ちのみならず、子どもの育ちのおもしろさや子育ての魅力を感じる親を育てていることになっていたということ、もう一つは親は必ずしも自分の都合を優先した預けやすさやサービスを保育園に求めているわけではないということである。

現代の親世代が、人との関わりが希薄で乳幼児に接する機会もないままに親になり、子育てを難しいとか不安だとか感じてしまう場合が多くある。しかし保育者の専門性で

子どもを理解するための視点を添えていくことにより、子育てのおもしろさや我が子の魅力に気付くことができると再認識できた。

人と関わることを心地よく思い、人への優しさや思いやりが育つ子ども、子育てのおもしろさや我が子の魅力に気付くことができる親支援、このことが乳児保育の課題だと言えるのであれば、“ていねいな保育”とは、“保育者の専門性とは”どのようなものであるか、具体的に共有できる厳密な言語化をするための実践と研究をしていくことが今後求められている課題であろう。

参考文献

- 1) 東京家政大学ナースリールーム10周年記念誌
- 2) 堀尾輝久 「地球時代の教養と学力」(かもがわ出版) 2005年
- 3) 汐見稔幸 「親子ストレス」(平凡社新書) 2000年
- 4) 池本美香 「失われる子育ての時間」(劉草書房) 2003年
- 5) 後藤和文 「子どもが輝くとき」(熊日新書) 2002年
- 6) 庄司順一 「保育の周辺」(明石書店) 2008年
- 7) 数井みゆき・遠藤利彦 「アタッチメント」(ミネルヴァ書房) 2005年
- 8) 岩村暢子 「現代家族の誕生」劉草書房
- 9) 大宮 勇雄 「保育の質を高める」(ひとなる書房) 2006年
- 10) 浅井 春夫 「子どもの権利と保育の質」(かもがわ出版) 2003年
- 11) 大豆生田 啓友 「支え合い、育ち合いの子育て支援」(関東学院大学出版会) 2006年
- 12) 北野 幸子, 立石 宏昭 「子育て支援のすすめ」 2006年

Summary

The nursery room of Tokyo Kasei University began its activity in 1967. We celebrated the 40th anniversary last year. To see and verify the quality and the role of our activity in child-care, we sent a questionnaire to all parents whose children graduated from our nursery room during these 40 years. Most of parents relied on their children and considered their development positively well. They changed their way of seeing children and enjoyed taking care of children after experiences in the nursery room. More than half of the parents agreed that the quality of rearing children was good because child-care specialists dealt with children in a very careful and intimate manner. We have to study more about the real specialty and expertise in the art of child rearing.